

Author Meets Readers with Ivan Jablonka

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL) では、イヴァン・ジャブロンカ氏によるトーク・イベントを開催します。
名古屋大学の学生・教職員だけでなく、一般の方もご参加いただけます。

5月22日 (木)
16:30-18:00

名古屋大学GRL
2階レクチャー・ルーム

定員：約50名

逐次通訳（日仏）



About the Book

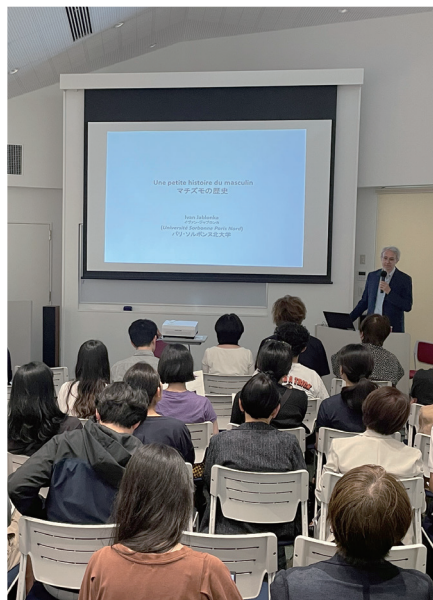
『マチズモの人類史--家父長制から
「新しい男性性へ」』(明石書店,2024)

About the Author

フランクの出生地で、シカゴ・ボストン・ノーラ・ルナ大教授であり、フランス文学者。主な著作『朝刊』に、『誰にも気づかぬところのフランク』(2017年、『現代文壇』2018年)、『歴史小説と女主人マリア』(2020年 『いれどもたぐひなき大出陣』)。雑誌の文壇、文化研究を執筆し、第17回日本文学翻訳賞受賞。

About the Author

フランスの歴史学者で、ソルボンヌ・パリ・ノール大学教授であり、フランス学士院会員。主な著書（翻訳）に、『私にはいなかった祖父の歴史』2017年、『歴史は現代文学である』2018年、『歴史家と少女殺人事件』2020年（いずれも名古屋大学出版会）。数々の歴史・文学賞を受賞し、著書は17カ国語に訳されている。



GRL NEWS

Gender Research Library
Nagoya University

名古屋大学
ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

No. 14

2025年7月発行

トーク・イベント “Author Meets Readers with Ivan Jablonka” 開催報告

(名古屋大学ジェンダー・リサーチ・
ライブラリ研究員)
鹿野由行

2025年5月22日(木)、フランスより来日中であったソルボンヌ・パリ・ノール大学教授の歴史学者イヴァン・ジャブロンカ先生をお招きし、「Author Meets Readers with Ivan Jablonka」と題したトーク・イベントをGRLにて開催しました。企画側の想定を超える応募があり、会場であるGRLのレクチャールームには70名ほどの参加者が来場されました。

講演は、題目でもある「マチズモの歴史」(原題: Une Petite histoire du masculin)を論じるためには、すでに研究蓄積のある女性史(学)に加えて男性史(学)が必要であるという、ジェンダー視点の歴史分析におけるアンバランスさについての指摘からはじまりました。そしてマチズモ(男性優位主義)が人類史において常に存在してきたことについて古今東西さまざまな文化の事例を挙げつつ、3つの観点から分析が行われました。1) 男性の文化: 男性であることを特徴づける属性、態度、活動として、狩りや統治者などの暴力・武力の誇示、性差別的広告にみられる女性の性的消費が含まれる。そこでは非暴力と同様に、女性的な男性、同性愛など異性愛規範から外れる存在も排除

されてきた。2) 男性支配：同調性社会において権力、責任、富の男性による独占。男性による支配は肉体的強韌さによって由来すると考えがちだが、唯一神がしばしば高齢の男性として表象されるように、宗教や政治において男性による支配は肉体的強さではなく文化や規範によって形成されてきた。3) 男性の反革命：連綿と続いてきた男性による支配は、反フェミニズム運動や女性解放への対抗という形で、女性の権利や社会進出を妨げてきた。それらは時に女性を性的な存在として表象することで、男性の異性愛的な暴力の対象とすることを正当化しようとする。

講演は、先生の新しい著書『マチズモの人類史：家父長制から「新しい男性性へ」』（明石書店、2024）にもかかる内容を先生自ら説明していただける貴重な機会となりました。その後の質疑応答では、「日本社会において何が女性の社会進出を阻害しているのか」、「男性がマチズモを自覚し変わるためにどうしたらよいのか」などの質問が出ました。これに対し、制度の整備の重要性、個人の幸福度が社会に与える影響について、子育てを経た先生自身の体験に基づく個人の変容可能性について言及

されました。逐次通訳で行われた本イベントでは、時間の都合上用意してくださった資料のすべてを説明していただくことは叶いませんでした。そのため参加者の方からは続きのお話も聞きたかったというお声もいただきました。

イベント前にはGRLスタッフである名古屋大学院生との会談が、イベント後にはレセプションが実施されました。多くの方にご参加いただき、先生のご研究の重要さと関心の高さをあらためて感じると同時に、参加者を含め私個人にとっても日仏のジェンダー研究交流の貴重な機会となりました。

本イベントは南山大学の真野倫平教授がジャブロンカ先生にGRLをご紹介くださったご縁で、アリアンス・フランセーズ愛知フランス協会とアンスティチュ・フランセ日本の助成を得て行われました。厚く御礼申し上げます。



参加報告「『Author Meets Readers with Ivan Jablonka』に参加して考えたこと」

(名古屋大学教育発達科学研究科博士後期課程)

丸田梨乃

今回の講演会では『マチズモの人類史』の著者であるイヴァン・ジャブロンカ先生から直接お話を伺う貴重な機会をいただきました。'Une petite histoire du masculin'「マチズモの歴史」という講演テーマで進んだ本講演は、男性性の3つのコンセプトについて「男性の文化 (La culture virile)」「男性支配 (La domination masculine)」「男性の反革命 (La contre-revolution masculiniste)」にわけて構成されていました。

「男性の反革命」の中で触れられたことは、男性がフェミニズムや女性の人権を確保しようとする活動・人物に対してこれまでいかに反発してきたか、そしてそれが今なお見られていることについてです。内容はオランプ・ドゥ・グージュやブラジルの女性政治家への反発、そして男性による反革命的行動としてのナポレオン法典やアイアン・ジョンの逸話など多岐にわたっていました。その中でも特に、私自身の研究関心が性的加害であ

ることから、ブラジル初の女性大統領を性的な姿態にさせたステッカーを車に貼る嫌がらせのスライドがもっとも印象に残りました。

そのため、講演後の質疑応答の際に、講演内容に絡めて「なぜ男性は女性を性的に貶めることが攻撃になるとおもっているのか、女性よりも優位にたてることだと思うのか」という質問をさせていただきました。それに対する返答として「女性が女性であるということを思い出させ、恥を喚起させ、元の位置 (男性よりも下位) に引き戻そうという意図があるから」というお答えをいただきました。しかし、「なぜ”性的”に優位であることが必要なのか」「なぜ社会的、身体的に優位であることよりも効果的だと思っているのか」については、ジャブロンカ先生からの返答に加えて、男性における性的加害がもつ意味を探っていく必要があると感じました。

本講演のもととなった『マチズモの人類史』はマチズモが今日のような確固と

した地位を得てきた歴史をおもに扱っている本であるため、上記のような点についてはジャブロンカ先生の研究の射程圏外だと思います。したがって、『マチズモの人類史』を出発点として、私たち読者がそれぞれの問題関心をさらに深め、解決策を探っていくことが大事なのではないでしょうか。私個人としては、「なぜそのような性的な加害行動を取ろうとしたのか」そして「その行動を取らせた信念や態度を変容させていくことで女性に対する性的加害を減らすことはできないだろうか」と自分の研究関心の原点に立ち戻ることができました。

『マチズモの人類史』は私たちの社会に広く蔓延る男性優位の存在を明らかにしています。それは意識しなければ気づかないほど私たちの生活や文化に巧妙に浸透しています。講演を通して、よりその根深さを感じたとともに、これらの課題に向き合うことが21世紀におけるジェンダー諸問題の解決に必要なのではないかと考えさせられました。

参加報告「『Author Meets Readers with Ivan Jablonka』に参加して感じたこと」

(名古屋大学人文学研究科博士後期課程)

朴 成柱

GRLでは5月22日(木)、フランスの歴史学者イヴァン・ジャブロンカ氏を迎え、トークイベントが開催された。冒頭では司会を務めた鹿野由行氏 (GRL研究員) による講師紹介が行われ、その後、ジャブロンカ氏による講演と質疑応答が続いた。

今回のイベントでは、氏の著書『マチズモの人類史——家父長制から「新しい男性性」へ』(明石書店、2024年)を踏まえつつ、先史時代から男性性がいかに制度的に形成・強化され、ジェンダー不平等の構造を支えてきたのかが論じられた。家庭、国家、宗教、教育といった制度を通じて浸透した男性性が、男性を権力の中核へと位置づけてきた歴史的過程が、多くの具体的事例とともに示された。

一方、講演を聞きながら筆者の中に浮かんできたのは、こうした分析の枠組みが

主にマジョリティ社会を対象としたものであり、マイノリティ社会における男性性には異なる力学が働いているのではないか、という問いであった。というのも、抑圧される立場にあるマイノリティが、外部からの差別や同化圧力に抗するため、むしろ男性性を強調し、集団の結束を図る場面もあるからである。

このような視点を考えるうえで、在日朝鮮人コミュニティは一つの具体例として挙げられる。植民地支配の終結後も、朝鮮半島の分断や政治的不安により「帰国」が困難であった在日朝鮮人は、植民地主義的な構造が持続する日本社会において生き抜くため、民族団体を中心とした共同体の形成と強化を進めてきた。言語、文化、伝統を継承する営みは、アイデンティティと尊厳の源泉となり、外部の差別に抗う力ともなった。

しかし、そのような抵抗の営為の中

で、見過ごされがちだったのがコミュニティ内部における女性差別の問題である。家父長制的な価値観が根強く残るなか、女性たちへの抑圧や不平等は、外部との闘いの陰で後景に追いやられ、十分に可視化されてこなかった。在日朝鮮人女性たちは、日本社会からの民族差別と、自らが属する共同体内部での性差別という、重層的な抑圧のなかで生きてきた。

このように、マイノリティ社会における男性性は、単なる支配や抑圧の構造としてだけではなく、共同体の維持や連帯の手段として機能する側面もある。その複雑な位相を見落とさず、マジョリティ社会とは異なる歴史的・政治的文脈に即して、マイノリティ内部における男性性の在り方を問い直していくことが、今後ますます重要となるだろう。

市川房枝コレクションの設置

(名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ司書)
坂川万理子

今年は1945年(昭和20年)に女性に参政権が認められてからちょうど80年です。女性が政治に参加する権利を得てからまだ80年しか経っていないとは少し驚きではないでしょうか。また、生まれたときから当たりまえに女性が選挙に参加する権利があった若い世代の人たちの中には、この権利を獲得するために婦人参政権獲得運動に一生を捧げた多くの女性たちがいたことを知らない方もいるのではないのでしょうか。

市川房枝はそんな婦人参政権獲得運動家の一人で、1893年(明治26年)の5月15日、父・藤次郎と母・たつの三女として愛知県中島郡明地村(現在の一宮市)で生まれました。藤次郎は子供には優しく教育熱心ではありましたが、妻のたつには日常的に暴力を振る毎日で、房枝はこうした母の姿を見て育ちました。なぜ、女性は暴力に耐えなければならないのか、男性に従わなければならないのかと疑問を抱き、世の中を変えていかなければという思いが強くなった幼少期の経験がのちの房枝の活動の原点となったと言われています。

今回のGRLでの市川房枝コレクションは、市川房枝生誕の地である愛知で、多くの人に市川房枝という女性を知ってもらいたい、市川房枝に関する本をより多くの人に読んでもらいたいという思いから設置し、ライブラリ内の一室の中に90冊ほどのコレクションコーナーを作り、市川房枝や婦人参政権にかかわる資料を集めました。

どれも魅力的な図書ではありますが、房枝の生い立ちや生誕の地愛知でのエピソードが読みたい方には市川房枝著『市川房枝自伝 戦前編』、筑摩書房編集部著『市川房枝—女性解放運動から社会変革へ』、市川房枝著『市川房枝「私の履歴書」』等がおすすめです。また婦人参政権やその運動について知りたい方には伊藤康子著『女性と政治とどう向き合ってきたか 検証・婦人参政権運動』や児玉勝子著『婦人参政権運動小史』をおすすめします。こういった婦人参政権運動そのものをクローズアップした資料では市川房枝だけでなく、婦人参政権獲得に尽力した平塚らいてうや山高しげり等の活動も知ることができます。市川房

枝の生い立ちから87歳9か月の生涯を終えるまでの活動写真や遺品など合計約330点を収載した写真集『市川房枝生誕100年記念 市川房枝と婦人参政権運動』もぜひ手にとって見ていただきたい資料です。

市川房枝コレクションの資料の面白さはこの紙面でお伝えしきれませんので、直接足を運んでいただきお気に入りの一冊を見つけていただけたらと思います。

夏の日盛りに木陰の恋しい季節となりました。木陰のように快適なライブラリでコレクションの本を読み、市川房枝や婦選活動、女性の政治参加について考えてみませんか。



(名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ研究員)
鹿野由行

企画展示「LGBT+の権利と日本の同性愛者の歩み」

2025年4月よりGRL研究員に着任しました鹿野由行です。よろしくお願いいたします。私はこれまで日本の男性同性愛者を中心に、セクシュアル・マイノリティが集う場として知られている都市繁華街(ゲイタウン)や、日本のゲイ・ムーブメントについての歴史社会学的研究を行ってきました。この度、自身のこれまでの研究の知見を活かし、企画展示「LGBTQ+の権利と日本の同性愛者の歩み」を担当することとなりました。

毎年6月は「プライド月間」として、世界中でLGBTQ+の「解放」を記念するイベントが行われています。そのはじめは、LGBTへの警察の抑圧的な嫌がらせに対

するアメリカ各地で起こった暴動でした。1969年6月28日にニューヨークで起こった「ストーンウォールの反乱」は最も有名なデモの一つです。以降、自分たちの権利と尊厳(プライド)を求めるイベントが世界中で行われるようになりました。

それから四半世紀が経った1994年、ようやく日本で最初のLGBTによるパレードが開催されました。それはストックホルムから来日していたIGA所属(現ILGA)のビル・シラーと、ゲイ雑誌『アドン』の編集長であった南定四郎の偶然の出会いに端を発します。

日本のLGBTQ文化の発展は、雑誌によって育まれたといっても過言ではありません。しかし、アメリカでストーンウォールの反乱があった頃、まだ日本には同性愛者のための商業雑誌さえ存在していませんでした。戦後から1960年代にかけて「エロ・グロ雑誌」とも呼ばれる性風俗雑誌が出版され、そこでは同性愛、異性装、SMなど様々なセクシュアリティが扱われていました。その後、サークル誌を経て独立した商業雑誌が創刊されていきます。

本企画展では、これまで私個人が収集していた風俗雑誌やサークル誌、初期のゲイ雑誌やレズビアン雑誌、GRL所蔵のレズビアンサークルの資料集や関連する研究書を紹介しています。展示について解説するギャラリートークも行う予定です。是非お気軽にGRLにご来館いただければ嬉しいです。



GRL蔵書の紹介

1 あたらしいジェンダースタディーズ：転換期を読み解く

大嶋栄子，信田さよ子編．金剛出版（臨床心理学増刊；第15号），2023.

雑誌『臨床心理学』の増刊号。COVID-19のパンデミックによって様々な暴力やハラスメントや差別が増加し視認されるようになりました。DV・ケア・インターセクショナリティなどジェンダーに関わる諸問題について、カウンセリングの実務家、心理学・社会学・医学・文学等様々な分野の研究者、また当事者などが論考を寄せた一冊です。



請求記号367.211Os
(雑誌特集号コーナー)

2 ことばが変われば社会が変わる

中村桃子著．筑摩書房（ちくまスリマー新書），2024.

本書は「言語変化と社会変化はお互いに影響し合っている」という立場から、社会をかえる「ことば」について身近な例を多く示して解説しています。たとえば「セクハラ」のような新しいことばが社会を変えた（1章）、「男/女」「同性愛/異性愛」の二項対立を揺るがすためにはたくさんのことばの「ラベル」が必要（2章）、「バツイチ」は「離婚」の否定的意味をはがした、同様に「パパ活」が「買春」まで含むようになって否定的意味を薄めてしまうのは問題（5章）など。多くの例がジェンダーに関する基本的な問題を解説していることから、GRLではこの本をジェンダー入門図書コーナーに設置しています。



請求記号810.111Na
(ジェンダー入門
図書コーナー)

3 世界文学をケアで読み解く = Recovering care in world literature

小川公代著．朝日新聞出版，2023.

本書はキャロル・ギリガンの＜ケアの倫理＞などケアについての様々な知見を引用して、シャーロット・ブロンテ、オスカー・ワイルド、ヴァージニア・ウルフなどのそれぞれのケアの価値について解説しています。また20作以上の文学作品をケアの視点で読み解いています。たとえば、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』については、主人公は「無人島に一人漂着し二十八年過ごすのだが、彼の振る舞いがまさに「経済人」そのもの」だが、「実は（従僕の）フライデーのケア労働に支えられている」という視点が紹介されています。



請求記号902.0911Og

4 性差（ジェンダー）の日本史 / 「性差の日本史」展示プロジェクト編．

集英社インターナショナル（インターナショナル新書），2021.

2020年秋に国立歴史民俗博物館で開催された企画展示「性差（ジェンダー）」の図録*のダイジェスト版。「政治空間における男女」「仕事とくらしの中のジェンダー」「性の売買と社会」の3テーマで、古代から中世、近世、近代の資料と解説を紹介した一冊です。

* 性差（ジェンダー）の日本史：企画展示 / 国立歴史民俗博物館編集．歴史民俗博物館振興会，2020.
請求記号367.211Ko



請求記号367.211Se

GRL 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ
Gender Research Library Nagoya University

お問い合わせ：grl@t.mail.nagoya-u.ac.jp
電話：052-789-5111（代表）
アクセス：〒464-8601 名古屋市千種区不老町
地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口より徒歩1分

